

心理臨床家のプロフェッションの生成と継承Ⅲ¹

—自己への直面化、経験を言葉にすること—

前 盛 ひとみ ・ 岡 本 祐 子 ・ 上 手 由 香
奥 田 紗史美 ・ 深 瀬 裕 子 ・ 神 谷 真由美

本研究は、一人の心理臨床家のライフストーリーをもとに、①心理臨床家の専門性の獲得・深化のプロセスに、師との関係がどのように作用しているか、②後進への継承は具体的にどのようなになれるのか、③個人としての自己の発達と専門性の深化との間にどのような関係があるのか、という3点を検討した。その結果、学び手がどの次元で師と内的に出会うかが、師から何を継承するかという問題と密接に関連していること、心理臨床家の専門性の継承においては、心理臨床の具体的で実際の技術や専門性に直接的にかかわる“知”の継承と、師の姿勢や生き方が内在化される“関係性”レベルの継承という2つの側面があることが、仮説として見出された。また、心理臨床家の実人生における傷つきや悲しみが癒されるプロセスと、心理臨床の世界において持続的な仕事を完成させていくプロセスがパラレルに展開することについて考察した。

キー・ワード：専門家アイデンティティ、世代継承性、心理臨床家、語り

問題と目的

1. 専門性の獲得・深化のプロセスにおける師との関係

世代継承性 (generativity) とは、「次の世代を確立させ導くことへの関心」(Erikson, 1950/1977) である。次の世代のために自分の置かれたそれぞれの領域において、育て、世話をするという仕事を遂行することで、われわれのかかわりは次の世代との円環的なものになっていく(鏑, 2002)。これまで深めた専門的な仕事を次世代へと引き継いでいくことは、個人の心理発達においても、その専門的職業の質を保障し、さらなる発展へと導くという意味においても重要である。

心理臨床の世界では、1960年代から多くの先達の努力によって、資格制度、組織的教育体制とカリキュラムの整備が行われ、現在では心理臨床の初学者にとって実践と学びの場が一定水準保障されるようになった。また、近年、多くの優れた実践家が自身の臨床実践をもとに、様々な知恵や工夫をわかりやすい言葉でまとめ、書籍として出版しており、これも継承の一側面と言えるだろう。しかし、本研究では、組織的な教育体制の整備や多数の人への啓蒙といったシステム化されたマク

¹ 本研究は、2009-2012年度 文部科学省科学研究費補助金基盤研究(C)「3専門職種における生成継承性の心理的特質と発達過程に関する研究」(課題番号 21530691、研究代表者 岡本祐子)の一部として行われた。

口な継承ではなく、個人と個人の間でなされる直接的な継承の側面を具体的に検討したい。

そもそも、心理臨床家の専門的訓練においては、教育分析やスーパーヴィジョンといった指導者との関係の中での持続的な学びが重視されている。これは数ある対人援助職の中でも心理臨床家の専門的訓練を特徴づけるものだろう。特にスーパーヴィジョンは初学者には必須の訓練とされるが、心理臨床の経験的な指導者としてのスーパーヴァイザーは、常に心理臨床家としてのアイデンティティの基本となることや、その関係の中でスーパーヴァイザーに対する依存や理想化が生じ、芸能の世界でみられる師匠—弟子関係が、心理臨床の世界でも展開しやすいことが指摘されている(鏑, 2004)。例えば東畑(2011)は、自身のスーパーヴァイザー体験の自己分析を素材とし、スーパーヴィジョン関係がスーパーヴァイザーの担当事例の面接関係と同型のものになる「パラレル・プロセス」を認識したところから、「書物を読むように関係を外側から見ているのではなく、関係の中にながら関係について考えることのできる視点」が生成されたことを報告した。これまでも多くの臨床家が、教育分析やスーパーヴィジョンの中で、分析家やスーパーヴァイザーとの間に受容される感覚や疑問、葛藤といった情緒を伴いながら、心理臨床の本質を学びとってきた体験を報告しており(鏑, 2004; 永井, 2006など)、心理臨床の訓練・指導の中では、指導者や師との間で独特の関係が展開されることがうかがえる。それでは、心理臨床の専門性を身につけ、一人前になっていくプロセスにおいて、指導者や師との関係はどのように作用するのだろうか。学び手は内的レベルにおいて師から何を獲得するのだろうか。本論では、一人の心理臨床家の歩みをもとに、心理臨床家の専門性の獲得・深化のプロセスにおける師との関係について検討していく。

また、本研究の特色は、語り手である心理臨床家にとって、聴き手である筆者が“後進”にあたるという構造でなされていることにある。つまり、心理臨床家としての人生の歩みについての語りには、言語的・非言語的な“後進”へのメッセージが内包され、インタビューの場はまさに生きた継承の場となる。そこで、本研究では、心理臨床家の専門性の後進への継承について、語りの内容から継承の具体を明らかにするとともに、聴き手の内的体験を素材にして、“語られない”継承の側面も検討する。

2. 個人としての自己の発達と心理臨床家の専門性の深化

また、本研究では、専門性の深化にかかわる臨床家の内的要因についても着目する。岩壁ら(2007)による103名の臨床家に対する調査では、ライフサイクル上の変化と個人としての成長が臨床家としての成長に重要であったという回答が最も多かったことが報告されている。また、鏑(2003)は、「達成」が課題となる青年期には挑戦的で探索的、知的な取り組みが親和性の高いアプローチになりやすく、「世代性」が課題となる中年期にはクライアントとの関係に「包む」「見守る」といったものが色濃く反映する、といったように、ライフサイクルの違いが、精神分析家の基本的な構えの違いとして表れる、という仮説を述べている。さらに、ライフサイクル上のより具体的な個人の体験として、臨床家が大病を患うことで、患者の語ることに実感をもって理解できるようになったり(岸本, 2006)、母親となった臨床家が子どもをもつ母親クライアントの文脈の理解や実感を深める(山口・岩壁, 2012)といった報告もある。このように、実人生における体験や個人としての自己の発達が、心理臨床の専門性に一層の深みをもたらすことは珍しくない。また、逆に、心理臨床実践を通して、臨床家自身が“自分とは何か”という個人としての自己への問いに立ち返り、全人格的な変容をもたらすこともあるだろう。このように考えると、心理臨床の世界では、個人としての自己の発達と専門性の深化は切り離せないものである。本研究では、個人としての自己の発達と専門性の深化との関係にも着目していく。

以上の問題を踏まえ、本研究の目的は、一人の心理臨床家のライフストーリーをもとに、①心理臨床家の専門性の獲得・深化のプロセスに、師との関係がどのように作用しているか、②後進への継承は具体的にどのようになされ得るのか、③個人としての自己の発達と専門性の深化にどのような関係があるのか、という3点を検討することである。

方法

協力者（語り手） 山本力先生（面接当時60歳、臨床心理士、心理学博士）。広島大学教育学部卒業後、広島大学大学院教育学研究科博士課程に進学。昭和56年～岡山県立短期大学講師。平成元年～岡山県立大学助教授。平成11年～現在まで、岡山大学教育学部・教授。大学教員を勤めるかわら、非常勤の病院臨床、スクール・カウンセリング、被害者カウンセリングなど、多様な領域において臨床活動を行っている。また、地域教育相談の教育相談員、子どもホットライン電話相談事業の委員長、岡山県臨床心理士会の会長といった、地域の心理臨床・教育の分野における要の存在としても活躍している。

筆者は、調査面接まで山本先生と直接会う機会はなかった。山本先生に協力を依頼した最も強い動機は、筆者が対象喪失をテーマに卒業論文を書いた際に、山本先生の論文『喪失の様態と悲哀の仕事』に強いインパクトを受けたことにある。本格的な心理臨床の専門世界に入る前だったが、山本先生の論文に強く惹かれ、その後も「人生の中で最初に出会った臨床心理学の論文」として心に残り続けた。それだけに、山本先生の臨床と人生に強い関心を抱いていた。また、筆者は山本先生と同じく広島大学で心理臨床を学んでいる。山本先生の師である鑑先生の心理臨床の精神は現在でも広島大学で生き続けており、山本先生が鑑先生から直接学んだ第二世代とすれば、筆者はいわば第三世代にあたる。さらに、山本先生は岡山大学で臨床心理士養成に直接携わっておられる。こうした背景から、心理臨床家の専門性の継承という本研究のテーマにぴったりではないかと思われ、研究協力を依頼した。

手続き 研究の趣旨を説明するために一度会い、承諾を得た。その後、1対1の半構造化面接を行った。面接回数は3回であり、面接時間は1回につき2～3時間であった。面接内容は許可を得てICレコーダーに録音し、後日逐語記録を作成した。面接では、①専門世界への方向付け・志向の段階、②専門世界への参入（専門的訓練の始まり）から自立までの段階、③専門家としての自立・深化・拡大の段階、④次世代の育成の段階という4つの段階において、心理臨床家アイデンティティがどのように変容してきたのかを語ってもらった。論文執筆後、協力者である山本先生に校閲してもらい、事実関係に関して加筆・修正を行った。加えて、面接内容に協力者本人および恩師などの登場人物を実名で記載することを含め、公開の許可を得た。

分析 逐語記録を繰り返し読み込み、専門性の獲得・深化において重要と思われるテーマをピックアップした。さらに、語りを時系列で整理し、テーマごとに記述していった。山本先生の著書や、語りで出てきた書籍についても、語りの意味内容を考察するために必要に応じて資料として用いた。

結果と考察

I. 心理臨床家の専門性の獲得

1. 生育環境の中で身についたもの

(1) 教育者の萌芽

山本先生は昭和25年に兵庫県姫路市で生まれ、白鷺城の近くの古い町で育った。父親が高校の教

員であったことも影響し、山本先生は子どもの頃から漠然と教員の道を志向していたという。加えて、山本先生は子どもの頃から、教師に頼まれることを機に、インフォーマルな学習支援を行っていた。例えば、小学生時代には不登校のクラスメイトを毎日訪ねて勉強を教えるというエピソードがある。また、中学生時代には、担任教師に頼まれて1時限目の授業を始めるまでの10分間、しばしば生徒の前に立ち、授業の復習を先導したり、その授業科目に関連した知識を伝えていたのだという。その行為を「何となく嫌じゃないと思ってやっていた」と語っている。

教育者として生きる道の萌芽は、ひとつに父親の持ち込む教師文化の影響に求められること、もうひとつに人にうまく伝えることの楽しみという経験があった。そして、小学校の時は小学校教員になりたいと思い、中学校では中学校教員になりたいと漠然と思っていたのだという。ただ父親にはアンビバレントな感情が強く、必ずしも教師モデルではなかったそうである。おそらく義務教育の頃に仲間に「教えること」で得られた、それなりの有能感がその後の道を拓いたのかもしれない。

(2) 設計すること

また、山本先生は、ものづくりの好きな子どもであった。自分で図面を書き、それをもとに椅子や小物を作ったり、我が家の設計図を描くことにひそかな楽しみを見出していたという。沸き出したイメージやアイデアをもとに、具体的・实际的な形で実現していくという創造的な行為と、そこから得る喜びを知っていたとも言えるだろう。この当時、自然と身についた“設計する喜び”は、心理臨床の本格的な訓練の時代においても、様々なアイデアを企画し、実現する際に発揮されていく。

2. 心理臨床家への志向

(1) 青年期の孤独と内的模索

中学までは生き生きと適応した学校生活を送っていた山本先生だったが、高校に入学すると、進学校の雰囲気にも馴染めず、成績も思うように伸びなくなった。そして、子どもの頃から思い描いていた、教師の道に進む意志は次第に弱まっていく。自分の能力や限界を客観的に見つめながら、将来の方向性が定まらない感覚を体験する時期であったと思われる。そして、山本先生は、誰ともつながっていないような強烈な孤独感を抱くようになっていったという。

「自分の中で、ひとりだっという感じが強烈にしていた時代です。家族はいるんだけど、家族と一緒にいてもひとりだし、学校に行っても自分はひとりなんだ、みたいな感じがして。何か誰ともつながっていない、みたいなそういう感じが本当にしていましたね。」

こうした心境が続く中で出会ったのが、精神科医である島崎敏樹の著書(例えば、『感情の世界』、『幻想の現代』、『孤独の世界』、『心の辺境の旅』、『生きるとは何か』)であった。その感覚的で、繊細で、柔和なエッセーの世界に入り込むと不思議に心が癒されたという。

「『病める人は、健康な人の心の中にあるうまくいかない部分を5倍、10倍に拡大して見せてくれる。だからその世界に光を当てることで我々の心の隠された部分に光を当てることができる。』そういう一文に触れて、何かすごく自分の気持ちにぴったりした。心の傷にそっと手を当てるような。当時の僕の一人である感覚、孤独である感覚、いろんなことで悩んでいた感覚、進路が定まらない感覚。そういうものが癒される、みたいなね。」

大学入学後(大学紛争の最中)であったが、ベストセラーとなった『二十歳の原点』を山本先生は

震える思いで読んだそうである。著者である高野悦子は、学園紛争の嵐の中で自己を確立しようと格闘し、孤独を抱え、最後に自ら生命を絶っている。その死後、父親によって出版された日記、『二十歳の原点』には、「独りであること、未熟であること」を主題として、愛を求めながらも周囲とつながれない孤独と、激しく揺れ動きながら自分自身の存在価値や「生きる」ことの本質的な意味を見出そうとする著者の姿勢が赤裸々に描かれている。そして、大学紛争の最中にいた同世代として、この日記に共感を覚えた山本先生が抱えていた当時の孤独や自己の揺らぎは、相当なものであったように思われる。

このようにして孤独や家族的葛藤を抱えながら苦悩し、他方で島崎敏樹らの現象学的な精神病理学の著作に惹かれるうちに、山本先生は心理学の道を志向するようになった。高校で進路指導をしていた父親の情報もあり、その分野で伝統のある広島大学を受験することとなる。

この時期の体験は、その後の山本先生の心理臨床家としての道のりにおいて、2つの意味をもつように思われる。第一に、高校生当時、つまり専門家としての訓練を受ける以前に、山本先生は、孤独の中で自分と直面する体験をしていたということである。誰かとの関係に癒しを求めたり、別の何かに没頭することで苦しさを紛らわせることはなく、ただひたすら気持ちの惹かれるままに本を選び、没頭していった。これは、本の中の言葉を自分の体験と照合しながら、自分の内面で何が起きているのかを理解していく作業であったようにも思われる。また、孤独を抱える中で、島崎敏樹の柔らかくて優しい文体と人間観に触れ、自分の弱さや傷つきを、存在してよいものとして認められるような感覚を持ったのかもしれない。このように、山本先生の“孤独の中で自己と直面し、内面を説明するための言葉を探す”というあり方は、心理臨床家である以前に、個人としての自己の特質としてすでに見られている。

第二に、真に興味の持てる学問・職域と出会ったということである。青年期の進路決定は、アイデンティティ形成に大きな意味をもつ。山本先生は、子どもの頃から漠然と志向していた教師の道に突き進むのではなく、この時期に自分自身の様々な可能性や限界を吟味している。その結果、真に深い関心の持てるものとして心理臨床の世界と出会い、強い動機のもとに自分の生きる方向性を決定したことは、その後の職業アイデンティティの形成において重要な意味を持つだろう。山本先生は、心理臨床家を志向することに明確な内的必然性を自覚していたと考えられ、それは心理臨床の世界に自らを位置づけようとする強い意志へと結びついていく。

(2) 心理臨床の世界を求めて

しかし、その当時、広島大学は実験心理学の牙城であり、思い描いていた臨床心理学の世界に触れる機会はほとんどなかった。そのような環境の中、山本先生は積極的に臨床心理学に触れる機会を求めた。その一つに、当時、他学部にいた上里一郎先生との関わりがある。上里先生の授業で「日本の自殺」をテーマとして選択・発表したり、未完に終わったものの、上里先生の誘いで翻訳を試みたこともあったという。さらに、学部3年生の頃に広島県の被爆地図を復元するためのアルバイトにも挑戦している。被爆者の家庭を訪問し、家の間取り図を再現し、どこで家族が亡くなっていたか、生き残った人たちがどこで過ごしているかを面接調査するという仕事であった。被爆者の人々の深い悲哀と生々しい傷にダイレクトに触れるような体験であったように思われる。

このように、本格的な専門世界へ参入する以前の強い意志と自主性に任せた活動が、山本先生その後の心理臨床家としての人生において、多くの翻訳書の出版、自殺予防の活動、“喪失と悲嘆”というライフワーク・テーマへの取り組みとつながっていくのである。

3. 心理臨床の世界へ

(1) 師との出会い

山本先生が学部3年生の頃、広島大学に、アメリカのホワイト精神分析研究所から帰国して間もない鎌幹八郎先生が着任した。その出会いは非常に強烈なインパクトをもたらしたという。

「僕の思っていた世界がここにある、と。強烈な印象。そこから僕の瞳孔が急に開いてきたんです。」「大学時代も半分モラトリアムが続いているので、何か飢えてた。広大受験して入って、そんなに嫌じゃなかったし、何か不適應を起こしたわけじゃなかったんだけど、何か自分がやりたいものと違う。自分が憧れた島崎敏樹の世界とは本当に大きな隔りがある。その中でのお会いだったので、ようやくそこでつながった。」「自分が根を下ろせそうなところが、ここかっていう。」

鎌先生との出会いは、単に心理臨床の師との出会いを意味するだけではないと思われる。「どのような世界で生きていくのか」という青年期のテーマに真摯に取り組みながらも、求める世界が得られず、不全感を抱えていた山本先生にとって、鎌先生との出会いは同時に「自分がこれから生きていく世界」との出会いでもある。「根を下ろせそうなところ」と意味づけられているように、心の中心軸が定まり、未来への展望が開けたような感覚をもったのではないだろうか。

(2) 創造的な学びの場

鎌幹八郎先生は日本の臨床心理学の草分け的存在であり、広島大学に着任後、広島の心理臨床の基礎を築き、発展させた。当時、教育学部における臨床心理学の指導教員は鎌先生一人であり、「扇形の構造」で教え子が連なっていたそうである。

当時の鎌先生の指導は、厳しく緊張した空気の中で行われていたという。例えば、ある日何かの発表で「準備ができてなくてお茶を濁すような発表になるかもしれないんですが」と前置きをして始めると、「お茶を濁すのなら、出て行きなさい」という趣旨のことを言われた、というエピソードがある。また、多少恰好つけて「理屈っぽいこと」を言うと、「なぜそう思うのか」と鋭く突っ込まれたという。「鎌先生の関わりは全部コンフロンテーションです」と山本先生は笑う。翻訳の仕事に取り組んだときには、鎌先生の研究室で、雑談や笑いの全くない沈鬱な空気の中、ただひたすら学生が訳を読みあげていった。山本先生は、怯えながらも、このようなピリピリとした緊張感が「嫌いじゃなかった。どちらかと言えば生き生きとやっていた」そうである。また、卒業論文や修士論文において、鎌先生から直接個人指導を受けた記憶はほとんどないという。臨床訓練においても、応答などの技術は本やテープから学んだ。

心理臨床の学びの貴重な場となっていたのが、「金曜会」と名づけられた、毎週末に行われる事例検討会であった。フロイトの始めた「水曜会」（ウィーン精神分析学会の前身）に倣って、山本先生が「金曜会」と名づけたそうである。そして、金曜会終了後の飲み会が、山本先生にとって院生時代最も楽しい時間であったという。なぜならそこは、心理臨床に関わる研修会やプロジェクト、翻訳書出版の企画に関するアイデアが、鎌先生から提案される場でもあったからである。「鎌先生からの大事な企画は酒の場が出る」のが定番であったという。子ども時代から、ものづくりやアウトラインを企画することに大きな喜びを見出していた山本先生にとって、鎌先生から出されたアイデアをもとに企画・実行することは、非常に心が弾むものであった。

「今でも何であんなにわくわくしてたのかっていうと、何か自分の臨床の世界を作り上げて行くグランドプランが提示される場っていうイメージなんですよ。グランドプランが提示されて、そこ

に自分の臨床の世界がわーっと拡がっていくような。次は一体何が提示されるだろう、と。」

まだ臨床心理学が社会的に認知されておらず、組織的な訓練体制も整っていない時代である。しかし、そこは、新たな世界を開拓していく能動的なエネルギーと可能性が溢れる場であった。鐘先生や仲間とともにアイデアを企画し、実行していくことを通して、山本先生の中に、生き生きとした実感を伴って、自分が着実に臨床家になりつつある、という信頼が根づいていったのではないだろうか。

(3) 「喪失と悲嘆」研究の出発

訓練初期の段階で、山本先生は喪失と悲嘆というライフワーク・テーマと出会った。そのテーマとの出会いには、主に2つの経験が背景にある。一つは、院生時代、偶然にも恋人を亡くした女性のグリーフ・カウンセリングの事例を複数経験したことである。「人間が愛を失うということはこれほど強烈なことなんだ」という実感を深めていったそうである。そしてもう一つは、山本先生の個人的な喪失体験である。この当時、ある大切な人との離別に伴い、山本先生は強烈な痛みと喪失感を体験した。

「いわゆる想定していた世界。それを断ち切られたときに、自分の中で思い描いていた未来が全部崩れてしまって。先に一体何があるんだろうって。そういう絶望感だったり、自分で対象を壊してしまったという罪悪感だよ。そういう痛みがものすごくあって。」「(失ったのは)生きがいという、かなり近い。生きがいというのは、外的な問題でありながら同時に内的な問題でしょ。この人は私の生きがいだっているのは外の対象ですよ。それと同時に内側にある生きがい感っていうのも失われる。そういう自分を立たせている土台というか、根っこというか、つかえ棒というか、それが外れた、みたいな。」「自分の中でもずーっとテーマになっていったという。だから自分の物差しから見て行ったときに、同じような体験をしている人とか、非常によく見えてくるというのかな。共感もしやすいし。何か力になればいいかなという思いがずっとあった。」

このときの喪失体験に伴い、山本先生は「本当は大事に思っていたものを壊してしまった」という強い悔恨と罪悪感を抱え続けたのだという。このように、グリーフ・カウンセリングの臨床事例との出会いと、山本先生自身の個人的な喪失体験が、「喪失と悲嘆」というライフワーク・テーマに向き合い続ける原動力となっていく。

Ⅱ. 心理臨床家の専門性の深化

1. スペシャル・クライアントとの出会い

山本先生は31歳のとき、助手として勤めていた広島大学を離れ、岡山県立短期大学に着任した。大変忙しく教育活動を行う傍ら、週に5～7人のクライアントと個人契約を結ぶ形で心理面接を行っていたのだという。その時期の境界例水準のクライアントとの出会いが、山本先生の専門家アイデンティティの変容における大きな契機となっていく。

契機になった事例の一つは、頻回の自殺企図がみられた重症の摂食障害のクライアントであった。山本先生はあるとき「あなたが死ぬということは、僕の臨床家としての命も絶たれてしまうような、非常に大きな意味を持つ！絶対死んでほしくない。」という本気の自己開示を行った。それを伝えたとき初めてクライアントに穏やかな表情が見られ、それ以来、面接は別の局面に入っていく、10年以上に渡り、深い信頼関係が続いていったのだという。このクライアントとの長い臨床経

験は、心理臨床家として重症のクライアントでも支えていけるという有能感を確認するようになった。

しかし、その後、自己愛性人格障害のクライアントとの困難な局面に直面する。心理療法の経過の中で激しい行動化が次々と生じてきたクライアントに対し、山本先生は強烈な心理的苦痛を感じるようになる。治療論を学んでも、事例検討会で助言を求めても、具体的にどうすればよいのかまるでわからなかったという。そのとき、山本先生にとって有効な対処法となったのは、論文を書くことであった。それが「見捨てられ抑うつと『守り』—青年期パーソナリティ障害の心理療法の事例検討から—」である。この論文の前半には、クライアントとの関係の中で生じる、セラピストの怒りや恐れ、無力感など、セラピスト側の体験が、断片的に記述されている。そして、後半では、「見捨てられ抑うつ」の特徴を論じる形で、クライアント側の感情体験について考察されている。そして、最後に、こうしたクライアントは、「体験の根源的な所で『守られている』という感じが持てない」のであり、「必要なことは心の中に『守りの存在』を実感し、その感覚を保持できる力が育つことである」と結論づけられている。

「自分がバラバラになりそうな感じで本当に苦しかった。」「あれを書いていた時期は、夢の中でもそうだし、空想の中でも何かに守られているという様々なイメージとかビジョンが自分の中で飛び交っていたんですよ。」「自分の中で(守りのイメージを)求めていたんでしょうね。クライアント自身がそれをすごく求めている。交互に深いところでつながっていたんだらうなっていう感じがして。」「逃げれば逃げるほど、そこを避ければ避けるほどもっと追い詰められるかもしれないし、崖から落ちてしまうかもしれないし、逆にそこと向きあって行けば、その先全然見えないんだけど、良い方向の道が見えてくるのではないか。そのとき信じるものがあるとしたら、たぶんそれを手がかりにして向き合っていたような気がしますね。」

そして、山本先生はさらなる困難事例と出会う。元々精神病圏の病理が潜んでいたクライアントが、心理療法の経過の中で調子を崩し始め、何度も怒りや不信をぶつけてきたのだという。山本先生は「うまくいかないのは、自分の技術の未熟さのせいなのだ」と思い、深く傷ついた。どんなに勉強しても、事例検討会で発表しても、解決の糸口は見つからず、心の傷は癒されなかった。そんな時、新聞社から、週に1回コラムを掲載してほしいという執筆の依頼があった。

「事例そのものを書くというよりも、そこから得たアイデアを新聞のコラムに書いたほうがはるかに自分にぴったり来て。それこそ外在化したんですね。深いところで感じているものを、形を変えて。その経験を通して、“我々は子どもを教えているようでありながらはるかに教えられているものが多いし、援助しているようでありながら、基本的には我々自身が治療されているというか、援助されている”という、そういう実感として結びついていく。」「事例ってそのレベルで解決しないような、自分にとって大きなテーマだったんだらうと思います。事例を超えた何か底の部分ですね。」

これらの困難事例では、心理臨床家である山本先生自身が、自分の心の深みに降りていかざるを得ない経験をしていた。それは、「技術の未熟さ」として意識され、深く傷つき、臨床家としての自己が根底から揺さぶられるような体験となる。「書く」という行為は、対象と心理的に距離をとると同時に、自分の経験を一旦外在化させ、自己の内面で何が起きているのかを理解していく作業でもあった。

さらにこのとき、山本先生は訓練時代に鑑先生や仲間と訳した本『心理療法の鍵概念』（E. シンガー著）を再び読み返したのだという。本の中に、“目の前のクライアントが語っていることこそが真実であり、どんなに難しいクライアントと出会っても、理論にこだわらない柔軟な姿勢で変化を受け入れていく力の中で、希望をもってやり抜いていける”という意味の記述を見つけ、その重要性を強く実感したのだという。このように、山本先生は、書くこと、読むことを通して自分の経験と直面化し、経験を言葉にしていく作業を行う中で、次のような自己理解を得ていく。

「わかるというプロセスを考えたときに、理論が随分と役に立ったわけですね。我々はどんなに頑張ってもある種の理論とかアナロジーを通して、フレームを通してしか見れない。そのフレームを若いときには必死に自分の中に取り入れようとした。」「でもそのことによって、結局目の前の人間であったり、自分自身が何を感じ何を思っているかという、そこへの眼差しがどうしても疎かになっていたんでしょうね。」

このように、強い苦痛を伴いながら自分の内面を見つめざるを得なかった事例との出会いは、山本先生が自身の臨床家としての姿勢を問い直す契機となった。書物に書かれている理論ではなく、クライアントとの関係を生きる自分を見つめることが、クライアントの苦しみを真に理解することへとつながる。ここで新たに獲得されたのは、臨床家自身のリアルな経験に目を向け、目の前のクライアントから真実を見出そうという姿勢である。しかし、それは理論を脱価値化するという意味では決してない。むしろ、理論との新たな対し方を模索する契機ともなっていく。

2. コミュニティ臨床への参入

43歳で岡山県立大学保健福祉学部に着任すると、山本先生は多様な領域で臨床活動を行う機会に恵まれる。平成7年からスクールカウンセラー事業が始まり、山本先生は第一陣として派遣された。学校現場での臨床はまさに「カルチャーショック」であったという。相談室で待っていてもクライアントは現れず、心理面接が開始されても数回で終わることがはるかに多い。守秘義務の問題も捉え直さなければならなくなった。加えて、被害者カウンセリングや病院での教員のメンタルヘルスのためのカウンセリング活動を開始したが、そこでも1回限り、または月1回の面接構造で数回しかクライアントと会うことはできなかった。

「力動的な方法は人間を見つめる目という意味では大事な方法論だとは思いますが、変容の技法であったり、一期一会の出会いの中で相手に役立つという意味ではすごく限界がある。」「理論は正しいかもしれないけども、（クライアントや現場が）求めているものとズレがある。そういう経験の中で色んなものを勉強し始めた。」

そして、山本先生の中で基本的な臨床観をもう一度問い直していく作業が始まったのだという。例えば、クリニックモデルにもとづいた臨床と、コミュニティモデルにもとづいた臨床は基本が異なるのではないかという考えをもち、その場に合わせて基本的なスタンスを変えた。そして、1回限りや数回しか会えないクライアントに役立つように、ブリーフ・セラピーや認知行動療法、家族療法を勉強し、その技法を用いるようになった。しかし、新たに勉強する理論や技法には、これまで身につけてきた力動的な心理療法においては馴染まないもの、否定的に捉えられるものもある。精神分析や力動的な心理療法が根幹にありながら、どのように脱構築し、必要に応じて他の理論や技法を取り入れて行くか、という問題には大きな葛藤も伴ったという。

「一見、水と油みたいなものを、技術が似通っているからとってくっつけていいものかどうか。技法の折衷はあるんだけど、理論の折衷なんてあり得るのか、とね。」「鑑先生だったらもしかしたらどんな人にも一貫した姿勢を保ち続ける、そういうものがあるのかもしれないけども。僕はそれでなかなかうまくいかない。」「考え方のモデルを変えていっているときには、鑑先生に聞きたいと思っていた。」

先述した困難な事例との出会いで培われた、目の前のクライアントから真実を見出そうという姿勢をもとに、山本先生は、これまで基本としてきた力動的心理療法の枠組みに留まらず、多様な理論を学び、独自の理論構成へと開かれていく。また、このように独自の理論へと開かれていくとき、「師ならどう考えるか」と、師との内的対話が行われている。

3. 学位論文の完成と喪の仕事の終結

山本先生は47歳のとき、喪失と悲嘆をテーマとした学位論文を完成させ、博士号を取得した。実は、訓練時代に山本先生が経験した、大切な人との離別に伴う喪の仕事が内的に終結したのは、この時期なのだという。学位論文を書くプロセスの中で、意識的・無意識的な水準で当時の「記憶をあたためる」作業が行われ、失われた対象との内的な絆の結び直しがなされたそうである。

「僕は『絆の結び直し』とよく言うんだけど、決してフロイトが言うように(喪失に伴って)絆を切るのではなくて。それは個人的な体験ではなくて、自分のカウンセリングの経験から出てきたんだけど。僕の体験でいうと、そうすることによって、もう一回絆が結び直せて、とらわれから解放された。悲しみながら、心の内的関係を結び直すことでようやく着地点を見つけたっていう、そんな感じですかね。それに四半世紀かかったという。」

このように、学位論文を完成させる仕事と並行して、失われた相手との間で育まれた記憶や思い出の適切な場所を見出していく心理的な営みが行われていたと考えられる。そして、それと関連したさらなる深い内的な変化について、以下のように語られた。

「(青年期から) 僕自身がわりと孤独と向き合いながら何かつながり感がない。それがやがて今、学生とであれ誰とであれ、積極的につながっている。そのこと(喪の仕事)と無関係ではない。直接関係はしていないんだけど、どっか並行していて。絆の結び直しができてきて、喪が本当の意味で明けるのと、積極的に人とかかわっていくということと、どっかつながっていて。それと同時にコミュニティ臨床が増えていったということも。3つくらいの層が。」「つながりの中で双方が癒されていくっていうのを根っこでずっと求め続けているんだろうな、と。若い時は自分の中で殻があったからなかなか素直になれなかったけど、この歳になったら、あまり怖いものがないので、自分の弱さをどんどんさらけ出していったり、学生に頼るのも平気になってきたし。」

上記の語りからうかがえるのは、防衛的な傾向が減少し、積極的に他者との関係性を深めていくという個人として成熟した姿である。この変容は、自身のテーマに長きに渡り直面してきたことによって、徐々に内的なつながり感と癒しが得られ、それまで抱えていた傷つきや恐れから解放されたことでもたらされたのかもしれない。

Ⅲ. 心理臨床家の専門性の継承

1. 師から受け継いだもの—持続すること、経験の成熟、自己の経験への直面化

山本先生が心理臨床の師である鑑先生から継承したものとは何だろうか。「この論文と30年間対話し続けてきた気がするんです」と、鑑先生が書いた『経験の成熟の契機について』（1975年）を紹介してくれた。発表された当時の雑誌（京都大学の相談室紀要）を今でも大切に持っておられる様子であった。山本先生はこの論文を何度も読み返したのだという。

この論文は、エリクソンが1950年代当時、勤めていたカリフォルニア大学で、マッカーシズムではないという誓約書に署名を強制された際、自分の信念を表明し自ら大学を退職した、というパークレー分校事件をもとにした論考である。山本先生には、この論文が、鑑先生がエリクソンと対話をしながら、当時抱えていたであろう内的な葛藤の中で、命をかけて書いたもののように感じられ、「鑑先生が目指す生き方、気概と覚悟が伝わってくる」という。

「僕の臨床を支えているキーワードを二つ言えと言われたら、鑑先生の自覚的、意識的なメッセージである『持続すること』、そして『経験の成熟』というテーマだろうなという気がしているんです。」
「自分探しているのが初めからあるわけじゃないですよ。そんなものない。若いときにいくら心をバラバラにして、本当の自分がどこにあるか、なんて言っても、そんなものあるはずないですよ。そこで何か自分の興味に惹かれながら、何かに関わり続けて行く。その中で何かが生まれる。自分になっていく。それが鑑先生の言う持続の問題であるし、我々が言うアイデンティティ形成ということも非常に大事なキーワードになっていくんじゃないかなと思う。」

また、山本先生は、鑑先生の言う「経験の成熟」が一体何なのかを、常に考え続けてきた。その道のりの中で、心理臨床家の発達・成熟のイメージは変容してきたのだという。山登りで例えると、「富士山のような独立峰を登って、高い山の頂上を目指す」のではなく、「連山を縦走し、上がったりがつたりを繰り返して歩み続ける”イメージである。

「今我々が生きている世界というのは、昔のものが役に立たなくなって行って、新しいものがどんどん出て。心理臨床もそうですよね。フロイトを究めれば心理臨床家として一番かっていうとそうではない。精神分析もどんどんどんどん変わっていつている。だからそれはやっぱり時代、社会、クライアントに応じて理論の中身がどんどんどんどん変わっていく。だからフロイトの時代の分析のあり方と今は明らかに違う。」

上記の語りには、心理臨床の世界の歴史と展望といった大きな流れを俯瞰する姿勢が表れているように思われる。時代の要請する心理臨床は変化し続けるものであり、到達すべき地点は存在しない。そして、臨床家は常に学び続け、変化し続けることの必要性が示されている。実際に山本先生は「今が一番心理療法の理論を勉強している」のだという。

さらに、山本先生が鑑先生から学んだものとして最も明確な意識のもとに語られたのは、「自分の経験とどう直面化していくか」という姿勢である。

「改めて思うのは、鑑先生から学んだものが何かって言ったときに、まあ色んなものは無数に学んでいるんですけど、少なくとも精神分析の理論とかそういうことではなくて、自分の経験とどうコンフロントしていくか。そこが大きいんだろうなって感じがすごく。臨床家としての経験に真摯にまなざしを向ける。その姿勢に共感を覚えるというところにつながっていくんです。」

訓練初期の時代に、山本先生は鑑先生との直接的な関わりの中で、厳しく直面化された。そして、その後の困難な事例と出会ったとき、山本先生がクライアントや自分自身と向き合う姿勢を崩さなかったのは、本来持っていた内省的な気質に加え、心理臨床家の土台として、鑑先生から受け継いだ精神が根ざしていたためと思われる。

「持続すること」、「経験の成熟」、そして「経験と直面化すること」は、臨床家としての自己のあり方を問う姿勢や、臨床家として目指す生き方と関わるものである。鑑先生から受け継いでいるものは、臨床家としての自己のあり方、生き方を問い続ける姿勢なのだろう。それは、理論や技術を超えて、山本先生の深い部分で内的に取り込まれているような性質のものではないかと思われる。ただし、山本先生は鑑先生を理想化や同一化の対象として自身の中に位置づけているわけではない。

「ただ、考えそのものが僕と似ているとか、そこが同じとはちょっと違うんですけどね。例えば鑑先生は自分とあなたというような甘い関係じゃなくて、自分と三人称の他者みたいな関係を志向される。徹底して突き放した見方がありますよ。僕はわりと融合していくことを求める。基本的志向は違います、明らかに。」「ただ根っこにある、鑑先生もわりと孤独っていうことを重視されたけれども、僕も別の意味ですごく孤独体験がある。」「僕の一番の学びの師匠というのは、鑑先生もあるんだけど、結局は自分の経験をすごくベースにしている。自分の中で変化していく“New experience”。」

ここでは、師と似た要素を感じながらも、明確な違いが強調されている。これは、師から取り入れた心理臨床家としての生き方を基本としながらも、多様な経験と変容を積み重ねる中で、独自の臨床家としての自己を明確に捉えているためではないかと思われる。ここに、心理臨床家として真に自立した姿が見出せるのではないだろうか。

2. 次世代への継承

(1) 教育者としての資質

山本先生が教育の世界に足を踏み入れたのは31歳のときである。岡山県立短期大学教養科の講師として着任した。当初は、高校教師並みの授業時間を担当し、さらに年間20回以上の講演活動を行っていたという。教育の道に入った際の苦労は語りとして構成されていない。子ども時代の同級生への学習支援、30代という若さで多くの講演活動を行うというエピソードからも、山本先生には教育に関する高い資質と能力が備わっていたことが推察される。60歳のとき、岡山県における教育活動の功績を認められ、福武哲彦教育賞を受賞していることも、山本先生が教育者として非常に有能であることを裏づけている。結果的に、山本先生は、心理臨床家を自らのアイデンティティの核としながら、子ども時代描いていた教育者という道をも自己の生き方に統合し、本来持つ資質を存分に発揮できる場を得たと言えるだろう。

山本先生は43歳で岡山県立大学保健福祉学部に着任し、6年間勤めた後、49歳で岡山大学教育実践総合センターに教授として着任する。大学教員として臨床心理士養成に携わったのは、岡山大学着任後である。次世代の心理臨床家を育成する立場には、同じ職域の同僚やスーパーヴァイザーといった様々なものが想定されるが、山本先生は、あくまでも大学の公教育として短期間、心理臨床家を目指す学生を指導する立場から、継承について語っている。

(2) 心理臨床における「人格化された技術」

山本先生自身は、師である鑑先生から、初期の頃、技術性を重視された指導を受けてきたとい

う。技術をとことん磨き、訓練していくことで、どんなに臨床的な感性のない人でもある一定のレベルまで専門性を身につけて行くことができる。臨床家のパーソナリティはあまり重視されていなかった。しかし、山本先生は、自らの臨床家としての経験と教育活動を通して、技術性だけでなく臨床家のパーソナリティも大きく関係すると思うようになった。

「つまりクライアントの内的感覚としては、眼前の心理臨床家の姿勢、振る舞い方、関係の切り結び方に、大きく印象づけられるのではないかと想像する。もちろん、それも広義の技術かもしれないけれども、もっと人格化された技術性、あるいは関係性での生き方とでもいうか…人格性に近いと思う。その人格性が、出会った人の何かを刺激し、二人に独自の関係の場が立ち現れてくるという感じでしょうか…。」

そこから、「関係の場」の違いによって、どう関わるかを発見しなくてはならないが、「どうすればその発見する腕が上げられるのかは未だよくわからない」という。

(3) 継承の具体

上記のような心理臨床の「技術」についての考えを深めながら、山本先生は具体的にどのように学生への継承を試みているのだろうか。「迷い続けているというのが実感」と言いながらも、指導において重視していることを語っている。

①理論の学び方を教える

まず、山本先生は、心理療法の理論の内容だけを教えるということはない。「理論モデル」とそれを生み出した「人」とは不離不可分であることを伝え、その理論家がどのような人物で、どのような人との出会いや出来事のなかでどのようなアイデアが生み出されてきたのか、その理論家の「経験の層」まで降りて学ぶよう指導している。つまり、出来上がった理論よりも、そのアイデアの源泉やプロセスを学ぶことを大切にしているのである。

②「型」を伝える—“本物”に触れること

心理療法の技術を伝えていくときに、「応答の型」と「見立てる型」を教えることが重要となる。「見立てる型」を作り上げていくのに重要と考えられるのが、「本物を何度も何度も見る」ことであるという。本物の臨床家の面接に培席することは現実的に難しいこともあるため、本物の臨床家が書いた事例論文をしっかりと読み込んでいくことをまずは大事にする。その臨床家がどのようにしてクライアントと出会い、見立てていくのかを追体験し、真似ていく。それが内的に取り入れられていくことを目指しているのだという。

③ありのままの経験を伝える

①とも関連するが、人生の経験とアイデアは切り離せないということは、先述したように山本先生が臨床家としての道のりを歩む中で、実感として持ってきたものでもある。自分自身が、心理臨床の世界で、どのように壁にぶつかってどのように迷い、どのようにして自分の考えを修正してきたのかというプロセスを、必要に応じて自己開示をしながら、ありのまま伝えることを大切にしている。

④迷いを共有する、共に学ぶ

学生との関係の中で、弱さをさらけ出したり、わからないことをわからないと認めたり、迷いをそのまま共有することができる関係を大事にしているのだという。「リキ先生も迷ったり転んだりしながら、何とかやっているんだな」と学生が感じ、自分がそうなくてもよいのだと安心する中で、何かを学び取ってくれることを期待している。これらを通して、学生自身の人生の物語

ができていくのではないかと考えているそうである。

「(指導は)全部難しいです。何も正しいことは言ってなくて、こういう経験の中でこういうアイデアが出てきた、それしか言えない。とにかく僕はそういう経験を歩んできたし、ある種の必然として、それを伝えるだけで。学生は学生の人生の必然の中で自分の物語ができていくんだけど。」「自分の見方を少しでも広げて行く、深めて行く。それを一人だけじゃなくて、学生と一緒にやっていってるといふ感じがありますね。ちょうど親が子どもと一緒に成長しているように、学生と一緒に成長しているというような。」「素でやっていける。わからないことはわからないと言えるし。リキ先生も悩んだり転んだりしながらやっていて、それでもそこから何か学び取っていくということがある程度伝わっているんじゃないかな。」

ここで興味深いのは、学生との関係性や心理臨床の技術の継承において、山本先生は、必ずしも師の教育者としてのあり方をそのまま取り入れているわけではないということである。むしろ、独自の経験や考えを中心に据えながら、学生との関係性を形成し、具体的な継承のあり方を模索していると言える。

(4) 聴き手の内的体験から

ここでは、インタビューの場における聴き手としての筆者の内的体験を記述し、“語られない”継承の側面について検討してみたい。

筆者が山本先生と調査面接のために会ったのは、1年半の心理臨床のブランクの後に、全く未経験の新しい領域で臨床活動を始めた時期であった。新しい領域では、これまでの臨床実践の中で培ってきた姿勢やアプローチの枠組みを一旦壊さなければならない状況にあった。未熟であることの自覚と焦りが強く、臨床家としての自己の感覚を非常に掴みにくい時期にあったように思う。

山本先生は、大変真摯に調査面接の依頼を受けてくださり、この研究に、自身を探索的に振り返り、自己発見の場となる期待を寄せておられた。しかし、いざ面接を始めてみると、筆者は山本先生の語りをしっかり聴くことができず、聴き手としての技術の未熟さと、山本先生と向き合う覚悟の不十分さを自覚せざるを得なかった。山本先生からも率直に「もっと向き合ってほしい」と言われたが、それは筆者自身の臨床家としての課題でもあったと思われる。どこかごまかしてしまう筆者の姿勢を突きつけられている気がした。山本先生の厳しく直面化する姿勢が伝わってきた。

一方、常に主体的に心理臨床の世界を求め、様々な活動に取り組んでいくというライフストーリーからも大きな刺激を受けた。新しい領域での活動を始めたばかりの筆者にとっては、山本先生が鑑先生から受け継いだ「持続すること」というキーワードに強く胸を打たれたことを覚えている。試行錯誤の苦しさを抱える時期であったために、一層励みになるメッセージでもあった。

また、出会った当初から「あなたのことも話してほしい」という山本先生の促しがあったため、最後の面接の日に筆者自身の心理臨床を志した動機や個人的な体験について話した。そのときの山本先生の言葉やまなざしから、「しっかり話を聴くとは、こういうことか」と感じたことを強く覚えている。「聴く」技術のモデルとして映っただけでなく、そこで癒され、満たされ、受け止められた感覚は、筆者の中に非常にポジティブな情緒を伴う体験として位置づけられた。

その後、本論の完成までの1年間に、筆者の中でとても不思議なことが起こった。臨床活動を続ける中で、壁にぶつかったとき、手応えを掴んだとき、学びや発見があったときなど、重要な体験の折には、山本先生の顔が浮かんだ。あえて連絡をとることはしないが、もし山本先生に話したら、その体験を聴いて喜んだり励ましてくれるだろう、専門家として甘いところは指摘してくれる

だろう、と思うのである。これはとても不思議な感覚である。おそらく、筆者の中で山本先生が、筆者自身の臨床家としての成長や変容の見守り手として内在化されるという現象が生じ、山本先生への信頼感が根ざしていったのではないかと思われる。

これらの内的体験を振り返ったとき、筆者が山本先生から学んだのは、端的に言えば「目の前の対象に深くコミットし、対象や自己と向き合う姿勢」であった。なるべく自分をごまかさずに語ろうとし、目の前にいる筆者に対して自分と向き合うことを求めるという、対象や自分自身と真摯に向き合う心理臨床家としての姿勢を、筆者は山本先生との関係の中でも体験したと言えるだろう。そして、このような関係の中で得られた信頼感と学びが意識化されたとき、山本先生の語る言葉と物語の意味がより一層深く響いてきたように感じられるのである。

総合考察

本研究の目的は、一人の心理臨床家のライフストーリーをもとに、①心理臨床家の専門性の獲得・深化のプロセスに、師との関係がどのように作用しているか、②後進への継承は具体的にどのような形で行われるのか、③個人としての自己の発達と専門性の深化にどのような関係があるのか、という3点を検討することであった。以下に、これら3つの目的に沿った形で考察していく。

1. 師との関係と専門性の獲得・深化

山本先生にとって鑑先生との出会いは、自分が「根を下ろす」世界との出会いでもあった。青年期の“どのような世界で生きていくのか”という自己定義に伴う問いは、鑑先生との出会いによって結晶化され、生きる方向性が明確になっていく。ここで、師との出会いは、専門家アイデンティティの形成以前に、より深い、個としての“生き方”に関わる次元での出会いとなる。だからこそ、山本先生は、「鑑先生が目指す生き方、気概と覚悟」に共感を覚えた論文と30年間対話し続けるのではないだろうか。ここで継承されているのは、理論や技法といった表層的なものではない。学び手である山本先生が本来持っていた“孤独の中で自己に直面化し、内省を深める”という自らの内的資質と共通したものを師の中にも見出したとき、意識的・無意識的な取り入れが行われ、山本先生の内に、自己と直面し続ける臨床家としての生き方が根ざしていったように思われる。そしてその後歩んでいく心理臨床の道のりの中で危機に直面した際に、より一層、師から受け継ぎ、自己が目指す“生き方”の本質をつかんでいったのではないだろうか。

一方、コミュニティ臨床への参入を契機に、山本先生は師のもとで学んだ力動的な心理療法の枠組みを超えて、多様な理論を取り入れ、独自の理論構成へと開かれていった。ここではむしろ、師から継承した理論や考え方を一旦壊し、独自に構成し直すという動きがある。しかし、このとき、“師ならどう考えるか”と、師との内的対話が行われていることは興味深い。これは、独自の実践経験と師から継承した考え方とを照らし合わせることで、師と自己との個別化が進み、独自の臨床家としての自己が明確化されていくという営みとして捉えられる。

以上を踏まえると、学び手がどの次元で師と内的に“出会う”かが、師から何を継承するかという問題と密接に関連していると言えるのではないだろうか。山本先生は自己の“生き方”に関わる次元で師と出会い、師の臨床家としての“生き方”に関わる次元での継承がなされたが、学び手によっては、理論や技法といったより具体的で実地的な専門性、あるいは師の人間観や独自のコミュニケーションといった次元での継承が行われるかもしれない。

2. 継承の2つの側面

ここでは、師と学び手との間で具体的に何が継承されるのか、という問題を深めるため、①師との関係についての語り、②次世代の継承についての語り、そして③聴き手としての筆者の内的体験、という本研究で扱った3つの素材をもとに、“継承”を2つの側面から整理してみたい。

まずあげられるのは、心理臨床の具体的で実際の技術や専門性に直接的にかかわる“知”の継承である。これには、山本先生が次世代への具体的な継承について語ったように、理論の学び方、応答や見立ての型の取り入れ方などが含まれる。また、言葉によって表現可能なもののみならず、師が行うコミュニケーションを直接的に体験したり、観察することによる、実践的なモデルとしての取り入れについても、実践の“知”として捉えられる。具体的な教育場面では、教員の心理面接への培席などがこれにあたるだろう。

もう一方の継承の側面として、師と学び手の“関係性”レベルで行われるものに注目したい。例えば、山本先生が鑑先生とのかかわりにおいて直面化され続けたことや、鑑先生の論文と30年間対話してきたことがこれにあたる。また、師弟関係ではないものの、筆者自身が山本先生との調査面接の中で、厳しい直面化の姿勢とあたたかく受け止められた体験をし、山本先生の“目の前の対象に深くコミットし、対象や自己と向き合う姿勢”を学びとったことが含まれる。これらを踏まえると、よき師との出会いでは、以下のような“関係性”レベルでの継承が想定されるのではないだろうか。まず、師との外的(現実的)なかわりの中で学び手は、感動、見守られ感、自己への直面、といった非常に情緒的な体験を伴い、師と“出会う”。そして、師の心理臨床家としての姿勢や生き方、スピリットを受け取っていく。このようにして師の存在が取り入れられると、持続的に師と内的(心理的)な対話がなされていく。こうした内的レベルでの動きは、Casement (1985/1991) が、「訓練の終わりに近づくにつれ、スーパーヴィジョンの過程は、外界のスーパーヴァイザーと心の中のスーパーヴァイザーとの間の対話へと発展していく」と述べていることと一致するだろう。このとき、先述したように、師とどの次元で出会い、師に何を見出し、継承するかは、学び手のもつ内的主題や主体性・能動性にも左右され、師または指導者にとっては最も意識されにくく、コントロールできない継承の側面である。そして、このように“関係性”レベルで師と出会ったとき、もう一方の側面である“知”の継承は、より一層深い意味を帯びてくるのではないだろうか。

3. 個人の内的主題を抱えることと心理臨床家であること——「悲しみを言葉に」

ここでは、実人生において山本先生が抱え続けた内的な主題と、心理臨床家(あるいは臨床心理学者)としての専門性の深化との関係について考察してみたい。山本先生のライフワーク・テーマである「喪失と悲嘆」の研究は、青年期の臨床実践と個人的な喪失体験から出発し、そして学位論文の完成を契機に、個人的な喪失体験に伴う喪の仕事が終結している。ここに、実人生における心理的な傷つきが癒されるプロセスと、持続的に取り組み続けた仕事(心理臨床実践と臨床心理学研究)が完成していくプロセスがパラレルに展開していることが見出せる。2012年に刊行された『心理学研究の新世紀4 臨床心理学』に掲載した『喪失と分離の過程と喪の仕事に関する検討』の最後を、山本先生は以下のように結んでいる。

喪失と悲嘆の問題を考えると、結局のところ、われわれにとって「愛とは何か」、「絆とは何か」、「生きる希望、生き甲斐とは何か」を問い続ける営みになる。・・・(中略)・・・振り返れば、大学院修士課程の頃の個人的な経験と精神科での悲嘆カウンセリングの実践を端緒にして、「悲しみを言葉に」(Shakespeare, W.)する研究を30年にわたって続けてきた。人は「何かを続けていると、関わり続けていると、それが“自分自身”になる」—この連続した独自の経験がアイデンティティと

いう感覚であると思う。面白いもので、この「連続した経験」の流れを内省していくと、いろいろな変化が感じられる。「悲しみを言葉に」する際にも、以前の言葉を脱構築して、新たな言葉に置き換えていく必要を感じる。臨床実践の道と同様に、悲嘆研究のそれも、いまだ歩みの途上にある。

山本先生は、30年にわたって、喪失の悲しみにくれる人に寄り添い、「悲しみを言葉に」する研究を続けてきた。これはまさに自身の喪失体験に伴う喪の仕事の一環でもある。心理臨床の仕事では、目の前のクライアントの悲しみや苦しみを理解しようと試みると同時に、自分の内面を見つめる。そしてそこで起こっていることを言語化しようと試みる。これまでも述べてきたように、山本先生にとって、自身の内面で生じる悲しみや葛藤に直面し、それらを言葉にすることは非常に重要な意味をもつ。それは、言葉にすることで「経験が意識化され明瞭になって、はじめて本当の経験になる」(成田, 2003) ためではないかと思われる。山本先生は、心理臨床の世界でクライアントと自分自身に向き合い、そこにある「悲しみを言葉に」するという営みを通して、最も直面化しにくい実人生での傷つきや悲しみを「本当の経験」として構成していったのではないだろうか。

さらに、上記の記述からは「悲しみを言葉に」する研究を続けることで「自分自身」になっていく、つまりアイデンティティの感覚が確かなものになっていく、と理解できる。これを踏まえると、個人の内的主題と臨床家としての専門性の深化には、以下のような関係が見出せるのではないだろうか。まず、実人生での傷つきや悲しみの体験が心理臨床の世界でクライアントに寄り添う原動力となる。この原動力をもとに持続的な仕事に取り組み続けることは、臨床家自身の傷つきが癒されるプロセスでもある。そして、その持続的な仕事への取り組みは、結果的に個人としての自己の全体的なまとまりを形成していくのである。松木(2006)は、「私たち(精神分析家)はクライアントの悲哀の仕事につきあいながら、私たち自身の悲哀の仕事を進めていこうとしているのである。」と述べている。私たちは、心理臨床の営みの中に自分自身が生きる希望を見出し、クライアントの悲しみや葛藤とともに生きることを通して、個人としての自己をも成熟させていくのかもしれない。

引用文献

- Casement, P. (1985). On learning from the patient. New York: Guilford Press. 松木邦裕(訳)1991 患者から学ぶ—ウィニコットとピオンの臨床応用 岩崎学術出版社
- Erikson, E. H. (1950). Childhood and society. New York: W. W. Norton. (仁科弥生(訳)1977 幼児期と社会Ⅰ みすず書房)
- 岩壁 茂・金澤吉展(2007). 心理臨床家の職業的発達に関する調査から—(4)職業的発達の契機に関する質的分析 日本心理臨床学会第26回大会論文集, 218.
- 岸本寛史(2006). セラピストの発病と患者体験の意義, 臨床心理学, 35, 606-611.
- 松木邦裕(2006). 思わしくない仕事でのこころの健康 臨床心理学, 35, 584-589.
- 永井 徹(2006). 教育分析, スーパービジョン, コンサルテーションという支援 臨床心理学, 35, 584-589.
- 成田善弘(2003). 精神療法家の仕事—面接と面接者 金剛出版
- 鐘 幹八郎(2002). 鐘幹八郎著作集Ⅰ アイデンティティとライフサイクル論 ナカニシヤ出版
- 鐘 幹八郎(2003). 鐘幹八郎著作集Ⅱ 心理臨床と精神分析 ナカニシヤ出版
- 鐘 幹八郎(2004). 鐘幹八郎著作集Ⅲ 心理臨床と倫理・スーパーヴィジョン ナカニシヤ出版
- 東畑開人(2011). “Super-Vision”を病むこと 心理臨床学研究, 29, 4-15.
- 山口慶子・岩壁 茂(2012). 母親であることと心理臨床家であること 心理臨床学研究, 29, 728-737.
- 山本 力(1989). 見捨てられ抑うつと『守り』—青年期パーソナリティ障害の心理療法の事例検討から— 岡山

県立短期大学紀要, 33, 12-18.

山本 力(1997). 喪失の様態と悲哀の仕事 心理臨床学研究, 14, 403-414.

山本 力(2012). 喪失と分離の過程と喪の仕事に関する検討 心理学研究の新世紀4 臨床心理学, Pp.52-77.

<付記> 本論文は協力者である山本力先生にあらかじめ御高閲いただきました。本研究にあたって貴重な経験を惜しみなく語ってくださった山本先生に心より感謝申し上げます。